
勃発！ 第58次黒軍最強選手権！

ハシリケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勃発！ 第58次黒軍最強選手権！

【Zコード】

Z2003B

【作者名】

ハシリケンシロウ

【あらすじ】

2006年度のプロ野球ディフェンディングチャンピオン、沖縄シユバルツ。今日の開幕戦を迎えるに当たつてのミーティングが、沖縄野球園ミーティングルームにて行われよつとしている。

(前書き)

企画、【色小説】にHントリーしています。

Hントリー作品群は、

色小説

とサーチをかけて貰うと全てヒットします。

様々な先生方の作品をお楽しみ頂けます。

また、当作品には、若干トネタが含まれております。

お食事中の方、『注意下さい』。

2007年、3月24日。

今年もまた、プロ野球の季節がやつて來た。

ディフェンディングチャンピオン【沖縄シユバルツ】の開幕ゲームは、ホームグラウンドである沖縄野球園で宇都宮ノワールを迎えてのナイターだ。

試合の前のミーティングが、ミーティングルームで行われている。

このチームの監督は、島本光明28歳。
選手兼任監督だ。

ある日突然オーナーが自宅を訪れ、兼任監督を要請してきた。

チーム一の問題児＆問題大人、門倉慶輔、剣持和俊組に球界全体が手を焼いており、もはやチーム内からしか監督のなりてを選べないような状況なのである。

ミーティングの段階から、この一人の問題ぶりは發揮される。

「はい、ミーティングを始めます。
まず、スターティングオーダーですが……、くおらそーひーーー！
勝手にぐつちやべつてんじやねえーー！」

ミーティングが始まっているにも関わらず、何かが「とんがつている」ことについて、マシンガントークを戦わせている。

「あれ、絶対骨格がとんがつてんだって。

ガキン時からとんがつてたし、水没してもとんがつてたし」「えーっ。

一
え
一
え

でも寝てる時、寝返りで下敷になつたら、わざと【せんべ】ひいて

「ひん曲がつてますよ？」

人の髪型が「くにや」ってひん曲かる事自体がおかしい
あのた
だろ！

しかも、起きたら速攻で元通りにどんがこてるし！」

光明も、やつと二人の話の筋が見えてきた。

【新】新の「和」の「和」

読者として、突つ込みたくなる気持ちも解るのだが、いまは、

ミーティングの時間だ。

手近にあつた己のファーストミットを渾身の力を込めて投げ付ける。

そのターゲットとなつたのは門倉、剣持組だ。

ぶつけるつもりなど毛頭無い。

ストレートしか投げることが出来ない素材であるため、あの二人なら、いつも容易くかわしてしまったろう。

いというのが現状だ。

「で、今、…！」

……、当たつた……。

慶輔はファーストミット直撃により歪んだ目に、涙を湛えて打ち震えている。

一方、光明も初めて喰らわすことが出来た爽快感にやはり打ち震えている。

この二人の特徴である、酸素内で急激に燃焼するマグネシウムのようないわゆる金髪と、激しく噴き上がる溶岩のような鮮やかな赤髪が、全く正反対の表情を浮かべる顔の上で全く同じ動きをしている。

「あれは多分、うちの『キ頭オーナー』みたいに整髪料でガチガチに固めてあるんだよ！」

ミーティング続けます……」

勝ち誇ったような笑みを浮かべた光明は、強引に話を締め括り、ミーティングを再開した。

しかし、この時光明は忘れていたのだ。
慶輔が高校時代己の父親といざいざを起こしたとき、余りの肝の座り方に逆に杯を勧められたことを。
当然、この程度では済まないのだ。

おそらく大惨事に発展するだろつ、本震前の余震は、尚も揺れ続けている。

そして、門倉慶輔という火山の噴火と共に、それは、本震へと変わつた。

パイプ椅子。

光明が気付いたとき、既にそれは、直前数十センチメートルの位置まで接近していた。

まして慶輔は、150キロ投手だ。避け切れる筈もなかつた。

寸分の狂いもなく、己の顔面めがけて飛んでくるそれを、
『一球』とにこの制球力を發揮すればお前のボク病は無くなるんだ
よー』
と苦々しく思いながら、やつとの思いで鼻先をかすめる程度の被害に止める。

燃えるような赤髪と同じ鮮やかな緋色の体液を鼻孔から噴出させながら、燃焼系アミノ式のCMに、一番最初に出てきた少女のような見事なバク宙を決めて、体勢を立て直した。

そして、

「なんのつもりだ貴様……。

起用の権限持つてんの、俺だつて解つてんだろうな……。

おー?』

との威しをかけてみる。

どう考へても、この程度の威しに屈する男では無いのだが……。

「ほつ、俺を延々と使わねえ氣か……。

そんなら、こんな世界からはとつとと任意引退して、おめえの親父と杯交すよー

そうすりや俺も、島本会系幹部だからなあー』

光明に対して、実家が指定暴力団であることは当然の『ごとく禁句だ。その禁を破つたものに対しても光明は、情け容赦を知らない武の神鬼

沙門の化身と化す。

「つして黄色い指定暴力団幹部候補VS赤い毘沙門とのトスマッチの『パングが……、鳴らされた。」

場を修羅場に変えたもつ一つの元凶である和俊は、どうにか、その場を收めようと考え方廻らせていた。

今年FA宣言による、メジャーへの移籍を日論でいる和俊にとつて、この様なくだらない」とで評判を落とすなどといふことは、有つてはならないことなのだ。

自分も一枚噛んでいるだけに、なんとしても、自分が收めなくてはならない。

「なあ、ちょっと落ち着くやつや、な。

「ローメイさんもが、キレるのは解るし俺も悪かつたと思つけど、どうせまたいつもの変わり映えの無いオーダーなんだろ?」

シユバルツのオーダーは、8月14日に1番と4番に入れ替わるだけで、誰かが怪我でリタイアしない限りは不動のオーダーだ。

光明も監督のくせに、ちゃんと9番DHに名を連ねている。どうやら、競争を激しくして、チームの活性化を図るといふ思想はこの男の脳味噌には無いらしい。

自分がメジャーに行つた穴は、この男が埋めてしまいそうな気さえしてくる。

取り敢えず一人の間に割つて入り、繰り出された拳を平手で受け止める。

「邪魔すんな」の、うん〇頭があ……」

名短距離馬タイキシャトルを彷彿とさせる、鮮やかなライトブラウンの髪に、燃える赤髪が罵声を投げ付ける。

「そりすよ！

マジウゼえ！

便所にぶち込んで流しちまいますよー。」

更にそれに、輝く金髪が続く。

しかも。

しかもである。

この一人、和俊に罵声を浴びせると同時に、その顔をめがけて拳を繰り出していた。

いくらプロ野球選手といえども、鍛え抜かれた肉体から、ハイスピードなクイックモーションで繰り出される二つの拳をかわせる筈もない。

【田には田を】

和俊は、二人の顎をめがけ、アッパー・カットを繰り出す。

思い思いの方向に放たれた4つの拳は、光明と慶輔の顎と、和俊の

両側の頬へとクリーンヒットした。

急所攻撃を受け、よろめく光明に対しても

「コーメイ！

ワシがうん〇頭ならコレは血〇頭、じゅー、更に慶輔に対しても

「コレも便所にぶち込んで流してしまつべー、このショノ〇〇頭があ！」

と罵声を返してしまったため、場の緊張感は一気に高まってしまった。

「いいぞー。

やれー」

との無責任極まる歎声が、ミーティングルームのあらゆる位置から飛び交い始めた。

遂には、このバトルを誰が制するのかという賭けにまで発展してしまつ。

昔はバトルに発展する度に、唾鼻狂喚の地獄絵図となつたものだが、もはや今では、余りにも頻発するため、シユバルツの日常に組み込まれてしまつてしているのだ。

三人以外の一軍登録選手22人全員に、投票用紙であるコンビニの、百円メモ帳がちぎつて配られる。

投票方法は、それぞれのヘアカラーの頭文字（光明はR、慶輔はY、

和俊はB、決着付かずはD）を記入し、キャプテンの玉木知昭捕手へと提出するというルールだ。

投票用紙が知昭の元に集まる。

やはり、いつもの劣勢が祟つてか、Rの文字は、一つも無い。

パイプ椅子や灰皿、テーブル等の飛び交う騒音と、三人の怒声をBGMに、なおも開票が進められる。

開票終了。

Rは最後まで一つも無かった。

やはり、若さが有利と見られたか、Y11票対B10票と、僅差で島本会系幹部候補が有利との下馬評となつた。

そんな中、Dに一票入つていた。

投票者は、この賭けの胴元である、シユバルツーの頭脳派、知昭だ。このバトルの決着がつかなければ、胴元の賭け金全額回収という、胴元冥利に尽きる結果を見ることが出来るのだが、彼には秘策があった。

澄みきつた青空のようなライトブルーの髪の下に、勝ち誇ったよう

なニヒルな笑みを浮かべてポケットから、おもむろに携帯電話を取り出す。

そして、

とある電話番号を入力し通話ボタンを押した後、株式会社沖縄シユバルツという会社組織に於いて、最大最強である召喚魔法の呪文を詠唱する。

「「ぐるーち様、「ぐるーち様、今直ぐミーティングルームまでお
来しください」

と……。

さすがにトップアスリートである。

三人共に、喰らったのは、まだ最初の一撃しか無い。
ゴングから20分経過して、それぞれの攻撃を全てかわしているの
だ。

言葉で場を収められないのであれば、実力行使しかない。
物を投げ付ける間接攻撃はかわされるとはつきりした今、和俊は拳
を打ち込むべく、光明を牽制しつつ、慶輔との間合いを計つていた。
光明よりは、慶輔を先に潰しておくべきなのだ。

『……、今だ!』

必殺の間合いを掘んだ和俊が、身を踊らせようと、モーションを起
こした瞬間、その闖入者は現れた。

「やめなさい!…」

あまりのイレギュラーに、そのまま前のめりに転倒し、豪快なヘッ
ドスライディングを試合前に華麗に決めてしまつ。

突然の大音響と共に打ち開かれた扉の前に立っている男。

その男の名は、黒路内幸。

黒々とした黒髪を、グリースでテカテカになるほどガチガチに固めたオールバックの髪型が、球団関係者や財政界の友人達に親しみを込めて【コキブリ頭】と称され、あまつさえ一弦垂らした長い前髪と、その名前の字面があいまって、ニッケルームまで【こくろーち様】と称される……、球団オーナーだ。

「まったく、あなた達便所頭ブラザーズは本当に、トコトコ、つづく、世話のやけるオコチャマですね」

いつの間にこんなあだ名を付けられていたのだろう。
個人的には、このようなオコチャマ共と一緒にしたくないで欲しいのだが。

「まず門倉くん。

貴方はいつも、

『こんな世界からは引退して、島本会の幹部になるぞこらあー。』
と、ことあるごとに監督を威しているそうですが、その威しはもう、
使えません」

和俊は、聞耳を立てる。

この威しに対し、有効な対策など無いような気がするのだ。
果たしてどのような手を打つたのだろうか。

「監督の父上であり、島本会系の長である島本典弘氏にお会いして参りました。

その際、氏から【門倉慶輔が沖縄シユバルツを自由契約になるか、
門倉が45歳になるまで、門倉には手を出さない】との旨、約束して頂きました。

これは、氏の直筆による念書の写しです。

法的に充分な証拠能力を持つ契約書であり、何人たりとも、これに抵触することは出来ません。

たとえ、貴方ご自身であつてもです」

成程。

さすがに球団オーナーともなると、いっぽしの財界人だつたということか。

要するに、ヤクザにも顔が利くという訳だ。

「うちの選手にちょっとかい出すんじゃねえ！」

と怒鳴り付けてしまえばいいのだ。
とても単純なことだつたらしい。

「さつすがこくろーち様！

ヤクザ相手に見事な飛び込み！

黒光する「ゴキブリ頭は伊達じやないっすねえーー！」

光明が、手を叩いて喜んでいる。

そんな光明を無視するかのように、ゴキ頭オーナーは続ける。

「門倉くん。

貴方は、人気、実力共にトップクラスの、日本球界のスター選手です。

我が球団の象徴とも言える方ですので、もう少し自覚を持つてくださいね。

これからもよろしくお願ひします

さすがは財界人。

喰らわした後のフォローも忘れない。

「次に、島本監督。

試合における起用の権限は、確かに貴方にあります。

……、ですが、人事における権限は、その一切が私にあるのだといつことをお忘れなく。

今後もこのようなことが続くよつなら、貴方の管理能力を問わなければなりませんよ？」

元々彼が頭を下げて頼み込んだらしいため、おそらくこれは只の威しであろうと思われるが、このレベルのお灸を据えておけば、暫くはおとなしくしているだろう。

「さて最後に、」

「どうやら最後の締めに入るらしい。」

和俊は、なんとかこの事態に收拾が付いたことに、心の底から安堵した。

メジャーに行けるのは、年齢的にももつ今年をおいて他に無いのだ。

「剣持くん」

「エッ！？」

和俊は、ほうけたような顔で、間抜けな返事をした。

まさか自分にも、彼等と同等の否があるとは思つていなかつたのだ。こすようなことがあれば、

「貴方は、今オフに獲得するFA権行使して、メジャーへの移籍を考えていると監督に打ち明けたそうですが、今後も騒ぎを巻き起こすようなことがあれば、

『剣持和俊外野手はこれほどの問題児ですよ』
と、貴方が起こしてきた騒ぎを逐一、メジャーの各球団の人事担当宛てに、ファクシミリで報告して、注意を促しますよ?』

「……、それだけは……、『勘弁を……』

黒光する『キ頭オーナーが繰り出す言葉のパンチを前に、言葉を返すことが出来たのは、唯一和俊のみであった。

「まあ皆さん、試合開始まであと2時間30分です。
練習に出なければならないことを考慮に入れると、もう殆んど時間が有りません。
張り切って片付けましょう」

キラキラと輝く黒々としたオールバックは、仕合の締めに入っている。

「門倉くん、剣持くん、島本監督。

あなた達三人は罰金25万円と、一週間のベンチスタート処分とします。

次は、罰金100万円で、一ヶ月間『軍に落とす』ことになりますからね』

【株式会社】沖縄シユバルツ。

そういう正式名称を【冠した組織】に於いて、【オーナー】という特別な名を【冠した】【会長】が最強なのは当然なのかも知れない。

今回突然に勃発した黒軍最強選手権は、黒光する「キブリ」頭の黒路内幸オーナーの言葉のパンチ三発による一撃必殺のK.O勝ちで幕を閉じた。

従つてシユバルツ（黒軍）最強は【黒】……とこいつで良いのだろつか……？

否！

否なのである。

黒路オーナーは本来ミーティングに参加すべき人物では無いのだ。

思い出して頂きたい。

本来ここに居る筈のないこの男をここへ召喚したのは誰であるのかを。

そして、召喚魔法を詠唱した動機はなんであったのかを。

捕手、玉木知昭。

この男もまた、陰ながら、シユバルツ最強選手権に頭脳戦をもつて参加していたのである。

今回勃発した黒軍最強決定戦。
それを制したのは、主力である赤でも黄でも茶でもなく、ましてや、絶対的支配者である黒でもなく、【エロ野球の申し子】ライトブリーの玉木知昭だった。

だがやはり、シユバルツ（黒）である。
いずれはあのツヤツヤと輝くオールバックに完全支配される日が来るだろ？。

その日が来るまで、シユバルツ最強決定戦は続く。

ちなみに、捕手、玉木知昭。

彼もまた【ブルーレット置くだけ（しかも詰め替え直前）頭】として、便所頭ブラザーズに加えられてしまつたことは、いつまでもない……。

END

(後書き)

微妙ですねー、すいません m(—_—) m

ボーダーラインを探る意味での実験も兼ねてあります(^_ ^ ;)

お手汚し失礼いたしました

m(—_—) m m(—_—) m m(—_—) m

ではでは m(—_—) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2003b/>

勃発！ 第58次黒軍最強選手権！

2010年12月21日02時48分発行